

木下順二評論集

1954~1955年

3

未来社刊

木下順二評論集 3 【全一〇巻】

一九七三年一〇月五日 第一刷発行

定価 一二〇〇円

©著者／木下順二

発行者／西谷能雄

発行所／株式会社未来社

東京都文京区小石川三の七

電話（八四）五三〇〇代表

振替東京八七三六五番

本文印刷／新協印刷

装本印刷／形成社

製本／今泉誠文社

凡例

一、本評論集全十巻は、木下順二の評論、随想のほとんどすべてを可能な限り時間順に収録したものである。但し各巻の内容は、次の六項目に分類整理される。

I 主として演劇一般について

II 主として自作について

III 主として演劇外の問題について

IV (以上を「自」に即してのものとすれば) 主として「他」について

V 主としてシェイクスピアについて

VI その他(あるいは主として馬について)

なお、単行本として既刊の『ドラマの世界』(中央公論社、一九五九年、未來社、一九六七年)、『ドラマとの対話』(講談社、一九六八年)、『随想シェイクスピア』(筑摩書房、一九六九年)及び『シェイクスピアの世界』(岩波書店、一九七三年)は、それぞれ一貫したテーマによる一冊本であるゆえに、本評論集に収録しない。『日本が日本であるためには』(文芸春秋新社、一九六五年)は、雑誌論文などを集めた評論集であるゆえに、分解して本評論集に収録する。

二、本評論集は全十巻をもって構成され、それぞれの巻には、次にかかげる年度内に執筆されたものを収録している。

第1巻 一九三五年から五〇年まで

第2巻 一九五一年から五三年まで

- 第3卷 一九五四年から五五年まで
第4卷 一九五六年から五七年まで
第5卷 一九五八年から五九年まで
第6卷 一九六〇年から六一年まで
第7卷 一九六一年
第8卷 一九六二年から六四年まで
第9卷 一九六五年から六七年まで
第10卷 一九六八年から七〇年まで
- 一、本評論集は、現代仮名づかいで統一したが、収録文章が三五年間にわたっているため、漢字の用法その他で不統一な部分がある。しかし、当時の文体を尊重してそれらはそのままとした。
- 二、各篇末尾に、初出の誌紙名・年月日を判明する限り付した。

一九七二年一〇月

編集

菅井 幸雄
松本 昌次

*おことわり 紙数の都合上、当初は全8巻の予定でしたが2巻増え、全10巻となります。ご諒承下さい。(編者)

木下順二評論集

3

目次

凡例

I

方言について	二
モームの戯曲	一五
演劇論——青年のために	一六
歌舞伎について	一六
女形のむずかしさ	一六
民話をつくるはなし	一九
「新劇」巻頭言	二二
民話と現代劇の結び目	二三
パリの無感動	二六
面白い東独の芝居——東西観劇便り	二三
「実験」と「観客」——特に中国の例から考えさせられること	二四
各国演劇の印象——英、仏、東独、ソ連、中国を歩いて	二五
戯曲の方法	二四
民話について(3)	一四
日本人の思想	一五

II

第三幕——小説・一九五四年」という題を与えられて	一七一
原作者のことば	一七五
くびいぶるク欄のアンケート	一七六
作者から	一七七
私の本だな——気になる誤字やかなづかい	一八〇
民話の再創造へ——作品自讃	一八二
『風浪』の思い出	一八四
『夕鶴・彦市ばなし』あとがき	一八九
作者から	一九三
『瓜子姫とアマンジャク』について	一九五
ひとことと自分のこと	一九八
『土の唄』のこと	二〇一
作家に聴く	二〇三
今度の舞台をほんとにたのしみに——『ききみみずきん』の原作者から	二〇七
『夕鶴』原作者として	二〇九
『東の国にて』について	二一三

III

読者への手紙	一三五
多忙について	一三七
ある晴れた日に——メーデー報告記	一四一
近くて遠い国、北朝鮮	一五〇
現代インドの演劇——インドの旅から日本の紡績工場の友たちへ	一五二
ボンベイに働く女性を訪ねて——インドの旅から日本の紡績工場の友たちへ	一六二
現代の理想像——平和論争にことよせて	一五五
いわゆる地方文化の持つ新しい意味について	三〇一
アジア諸国会議へ出発するにあたって	三〇
インド農村の軒下から	三二

IV

小津次郎著『エリオットの詩劇——その詩劇論と詩劇』	三七
A・C・スコット『日本の歌舞伎劇』	三二
服部之総著『黒船前後』	三五
瓜生忠夫と『未亡人』	三六

戯曲『姑の座』について……………	三三八
「文学」編集後記……………	三四〇
沢井余志郎さんと「生活を記録する会」の皆さんへ……………	三四三
鶴見和子編『エンピツをにぎる主婦』……………	三五二
芥川龍之介のこと……………	三五三
一つの感想……………	三五七
中野好夫氏について……………	三六〇
梅崎のこと……………	三六三
加藤道夫をおもう……………	三六六
『イギリス解放詩集』序……………	三六八
『母の歴史』について……………	三七〇
山本有三『西郷と大久保』他解説……………	三八三
「文学」編集後記……………	三八三
ないものねだり——越路吹雪さんへ……………	三九〇
岡田嘉子・崔承喜・ウラーノヴァ——旅で会った三人の芸術家たち……………	三九五

V (ココニ該当スル文章ハコノ時期ニハナイ)

VI (ココニ該当スル文章ハコノ時期ニハナイ)

I

方言について

先日 James Bridie の *The Pardoner's Tale* を訳しかけて、やはりすっかり困ってしまった。むしろあの強い Scotch dialect をどう日本語に移しかえるかについてである。日本語のどんな方言に置きかえたらいいのか。

などと考えるのが既におかしなことだといってしまうばそれまでの話である。「わたくしへ行きませんばい」、または「おら、は、行がねす」、これを英語のどんな方言に訳しわけたところで、九州と東北が出るはずがありはしない。

ありはしないし、また事実無理をしない方がいい場合もあるだろう。Bridie の場合は、私は結局そう思った。厳密に言えば許されないことだろうが、この Scotch 方言は、この場合方言というより一種のなまり、与太者の slang と考えてそう訳す。だから方言ではなくて東京弁（これも実は方言だが）の、与太者なまりの言葉に、ほんのちょっと方言的ニュアンスを入れて、ことをすましたことにした。

だが Syngé の Gaelic になると、少くとも私にはそう簡単に考えられない。浮浪の与太者も持っている生活とは、それは質のちがった生活である。土地を耕して、そこに根をはやしている農民。海のかおりのしみこんでいる漁民。あるいは飼っている羊の抜け毛が服の裏にまでこびりついていそうな山の人。浮浪の鑄屋や、漂然とあらわれる聖者にまで、そういう匂いはしみとおっている。だからどうしても方言で訳さねばならず、とすると、日本の国にさまざまあるどの方言をあてはめたらいいか。それが答えられなければ当然 Syngé は訳せない。だから私は、訳したいのに Syngé が訳せない。

尤も以前、上演用に一、二訳してみたことはある。そのおり、*In the Shadow of the Glen* には、なるべく暗うつな感じの東北方言をつかってみた。一方 *Playboy of the Western World* には、なるべく明るい海つべたの広島方言をつかってみた。けれどもこれは、所詮使ってみたというだけのことで、Syngé は一種類の方言で、暗い、明るい、二つの効果を十分に出している。そういうような日本語がみつからない限り、私には Syngé が訳せない。

だが、そういう日本語が果してみつかるものだろうか。私はみつからないと思う。Syngé にしても、ああいう方言をただ「みつけた」だけで書いているのでは、恐らくないのである。それは彼も Yeats に一喝されて Aran 島へ行き、ああいう言葉（と生活）をみつけて喜んだにはちがいない。だが彼は、現実の Gaelic を基礎にして、彼なりの言葉をつくり出している。それを詩にまで高めている。だからこそ彼が戯曲の中で使っているあの強い Gaelic は、にもかかわらず言葉としての普遍性を持っているのだと、私は現実の Gaelic を聞いたことなどむ

ろくないが、これは確言できるように思う。だからして私がまだ *Styge* を訳せないでいるというのは、つまりそういうふうな意味で *Styge* を訳すのに適当な日本語が、まだつくれないでいるということなのである。

私も言葉をつくってみたことはある。民話劇で、どここの地方へ持っていったとしても、どんな階級のどんな年齢の人にもわかるという一種の普遍的方言を。そしてその試みは、それなりには成功した。だが私には不満がある。こういう言葉では「生活」が描けないという感じがある。一体現実の方言は、それが強い方言であればあるほど、その土地の「生活」と強く結びついている。山奥へ行くと、たとえば農耕の際に使う形容詞なら形容詞が、そこから *derivate* して、森羅万象を形容する（但しその地方でだけ通用する）形容詞にまでなっているようなことはよくある。そういう場合そういう言葉は、どんなにそれがわかりにくくても、内に生活のひびきを包んでいる。ところが私のつくった普遍的方言は、生活のひびきが、いいかえれば現実性が稀薄である。だから従ってその言葉で描かれる民話の世界は、私の意図に反して、現実とひとつちがった「おはなし」の世界になってしまっておそれがある。もちろんこれが、単に言葉だけの問題でないことはいうまでもないが、言葉の面からいってもそういうことがあるのである。

一体ヨーロッパでは封建制がくずれて統一的な国語がこれから生れようとしていた頃に、日本では却って強固な封建体制が各地の交通を遮断してしまって、以来明治まで数世紀、各地の方言はその地方だけでえらく洗練されてしまった。そのことの被害を今私たちはいろいろな形で受けているわけだが、それでも現実に語られている日本語が、今やっと共通語への方向に進

み出していることは確かである。国語学者や外国語学者と協力しつつ、私たち戯曲をかいている人間も、国語と方言の問題をちみつに考えながら、この現実を押し進める仕事をして行きたいと思っている。

（「英語青年」一九五四年五月）